

後藤英世

(大分農林水産研野茶)

【目的】

ネット誘引によるピーマンの雨よけ栽培では、ハウス内が最も高温になる夏季に収穫ピークをむかえ、作業負担も最も大きくなる。一方で、夏季の生産量の増加に伴い単価が低下するため、労働効率は最も低くなる。このため、夏季の着果量を制御することで作業負担の軽減と、労働効率の改善が図られると考えられる。

そこで、夏季の着果量を制御するための収量調節技術について検討した。

【材料および方法】

品種は‘さらら’を供試し、2003年4月1日および2004年3月31日に、所内の雨よけハウスに、畦幅150cm、株間70cmで定植した。着果量の制御法の検討のため、2003年7月18日に、側枝の先端から5節目の位置で水平に摘芯する方法と、第1次分枝節から第3～4節目の位置で枝数の30%程度の間引く方法(図1)とを比較した。間引きに最適な時期の検討のために、2003年7月4日、7月18日および8月1日に、前述の方法で間引いた。間引きの程度の検討のために、2004年7月15日に枝数の20、30および40%程度の間引いた。いずれも、商品果収量および品質を調査し、区制は1区5株2反復とした。

【結果および考察】

着果量の制御法として、側枝の先端を一斉に摘芯した場合は、側枝を間引いた場合に比べ、8月の収量の減少が著しかった(図2)。間引きの時期として、7月4日および8月1日に行った場合は、その後の収量低下が大きく、7月18日に行った場合が月別収量が最も平準化した(図2)。間引き後の品質は、果形が良好であったためA品率が向上した(図2)。間引きの程度は30%の場合が、ピーク時期の収量が抑制され、月別収量が最も平準化した(図3)。

以上の結果、ピーマンの雨よけ栽培において、7月中旬に側枝を3割程度間引くことで、月別収量が平準化し、秀品率が向上した。間引き時期の目安は、3月下旬定植では7月中旬の節数が15～17節の時、定植時期が異なったり、初期生育が

劣る場合は、間引き時期を調節する必要がある。

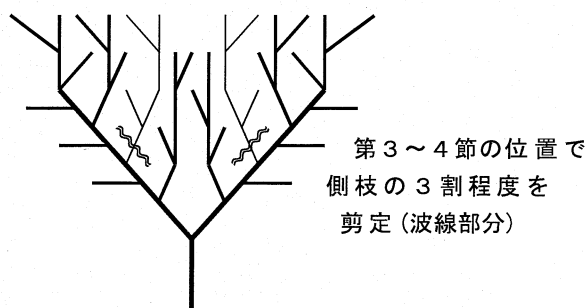


図1 ピーマンの側枝の間引き方法

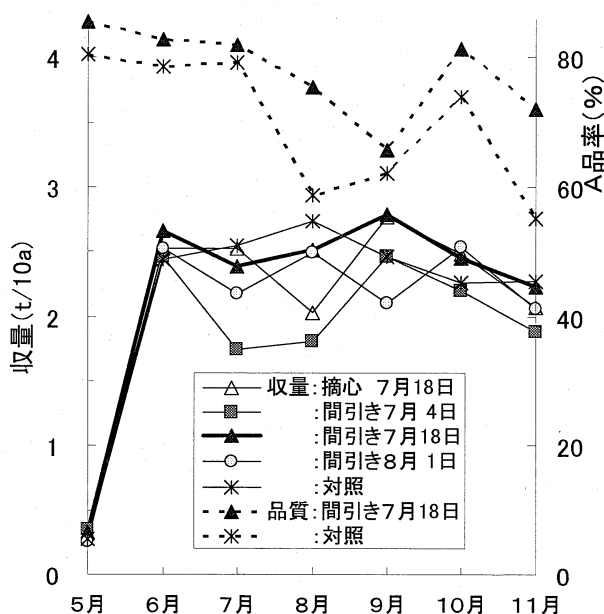


図2 ピーマンの間引き時期別の収量推移

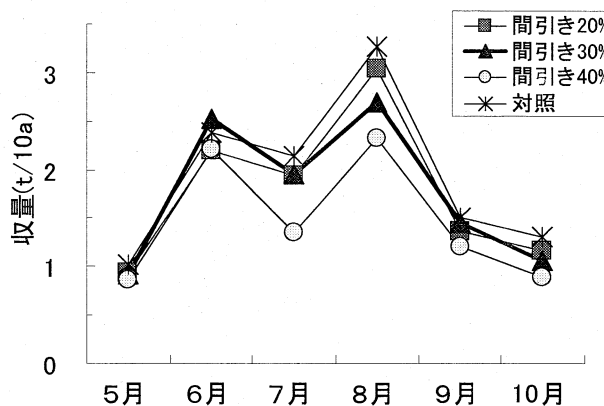


図3 ピーマンの間引き程度別の収量推移